



すべては知ることから始まる

岡 公美 / おか・くみ
生活協同組合エスコープ大阪理事長

先日、エスコープ大阪で食品添加物の学習会を開きました。私は専門家ではありませんが、自己学習したことをメンバーに伝えました。8年前、地域委員の時にエクスメーカーの方を招いて化学調味料の学習会を企画した際、昆布に含まれる様々な旨味成分であるアミノ酸の一つのグルタミン酸だけを、人工的に抽出したものがグルタミンソーダ(グルン)であり、それが一般的に「アミノ酸など」と表記されることを知りました。

今回の学習会のために再度調べ直したところ、砂糖キビの糖蜜からグルタミン酸を抽出する際、遺伝子を組み換えた「菌」にグルタミン酸を吐き出させ、それを炭酸ソーダで中和してグルンにするのが分りました。菌そのものを直接食べるわけではないので、安全性には問題ないとのことですが、日本では認可されています。安全だと言われても、「なんや分からん、なんか嫌やな」と思います。

9月、第7回生物多様性条約締結国会議／カルタヘナ議定書締結国会議(MOP7)で韓国に行きました。長年交流のあるウリ農(社団法人

人カトリックソウル大教区ウリ農村を生かす運動本部)と交流し、生物多様性NGO国際会議にも一緒に参加しました。そこで合成生物学という言葉に耳にしました。これまでの遺伝子組み換えとは違い、「人工的」に生み出された遺伝子を生物に入れて遺伝子を組み換えるものです。本当に信じられません。

韓国をはじめ、世界の人々と「NO! GMO!」を掲げてパレードをしました。ウリ農のGMOフリーゾーン宣言をしている生産者にも会い、思いを同じくする人たちが日本以外にもいることを実感し、嬉しく思いました。私たちが直面している問題には、日本の中だけでは解決できないことがたくさんあります。

ただの主婦が「なんや分からん」と思ったことについて知り、考え、行動する。日本の人たちはもちろん、世界の人たちと会い交流する。そしてまた「知る」。全ては「知る」ことから始まるのだなと思います。みんなが「知る」ことができる機会をたくさんつくっていききたいと思う今日この頃です。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 26 2014.11.01

02	Relay Essay ポコポコ すべては知ることから始まる ◎岡 公美
03	【特集】 【座談会】「国際家族農業年」を考える ◎市橋秀夫、安藤文将、箕曲在弘、秋山眞兄、吉澤真満子、野川未央、大橋成子
08	【Topics】 「私たちは米国の戦争を引き受けない!」——基地撤去から22年ぶり・新軍事協定に調印 ◎大橋成子 一反百姓——小さな“農民”からの発想 ◎斎藤博嗣&裕子
10	【Column】 Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記◎ 森の民が海に生きる◎津留歴子 モニラ・ジープニー通動② 道路にいるワニ◎小川二美子 ロロサエの歌が聴こえる② TO'OS NA'IN◎野川未央 美味しいマンガ② 『おとりよせ王子 飯田好実』◎安藤文将
12	わたしの友産友消じまん② LURAの会の巻◎中村桃子
13	APLA食堂◎ インドネシア・バプア州産 カカオマス◎大久保ふみ、廣瀬康代
14	【Voice from APLA partners】 【ネグロスより】KF-RCの5期生が卒業 【東ティモールより】地域を引っ張っていくリーダーをめざして
15	事務局だより

表紙のことば

インド・西ベンガル州シャンティニケタンで出会ったこの布。毎週土曜日に開かれる青空市場で、先住民族であるサンタルの女性が作ったものを売ってもらいました。ベンガル地方の野蚕によるタッサールシルクの生地に、地域特有のカンタ刺繍を施してあります。

娘の嫁入り道具として、祭事や大事なお客様をもてなす布として、家族の安泰を願いながら家事の合間をぬって、一针一针創意工夫を凝らして作り上げられてきた「祈りの布」です。昔は古布を重ね合わせ、着古したサリーをほどいて糸にして作られていたそう。なにひとつ無駄にせず、作り手によって個性が溢れる最高に豊かな布です。

木々を飛び交う小鳥たちの楽しげなお喋りを耳にしなが、小鳥たちの自由さへのちょっとした憧れもあって作り上げたのであろう気持ちや家族を想う気持ちを、とてもいしく思います。(子安奈緒)

【座談会】

「国際家族農業年」を考える

今年、日本の米価は過去最低額になると予想されている。さらにTPP妥結に向かつて食肉や乳製品の自由化が進むだろう。世界に目を向けても、大企業による土地収奪、食料自給とは逆の輸出指向型農業の拡大、遺伝子組み換え作物の大規模な作付け導入など、農をめぐる世界がガラガラと音を立て、従来の農民たちを、そして食の安全・安心を脅かしている。こうしたなか、国連は2014年を「国際家族農業年」と命名し、注目を集めている。この決定を歓迎しつつも、なぜ今、家族農業なのか、APLAが継続してきたアジア農民たちとの経験交流、具体的な現実のなかで家族農業のあり方はどう重なるのか、これからの農業の姿をどう描くのか……。今号のハリナは、こうした課題を出し合うために、アジアや国内の農民とつながってきた、都市在住者による座談会を企画した。さて、都会モンが農業のあり方に口出しすると、いったいどのような議論になるのか。(編集部)

座談会参加者

- 市橋秀夫 (APLA理事、埼玉大学教授)
- 安藤文将 (APLA評議員、武蔵大学教授)
- 箕曲在弘 (APLA評議員、東洋大学教授)
- 秋山眞兄 (APLA共同代表)
- 吉澤真満子 (APLA事務局長)
- 野川未央 (APLA事務局)
- 大橋成子 (本誌編集長)



業などの観点から話し合い、2011年、JCN C 15周年記念集会を山形の白鷹町で開催し、地域の女性たちを交えてさらに議論を重ねた。各国の参加者が共通の問題にしたのは、若者が農村で生活する意味や動機を失い、農村から離れていくなかで、どうやって若手農民を育成できるのか。持続可能な農業といっても経済的基盤となる市場へ直接アクセスするにはどうするのか。伝統的技術・農法・価値をどのように取り戻すのか。農村では男性が所有権や決定権を握っているが、それに対して、女性がどれだけ関与でき、決定権を持てるのか。また女性の収入向上は重要だが、女性が稼いだお金が家族のためだけに使われて、女性自身のためにだけ利用できることができず、家族の中だけでなく、共同体の中でも個人としての女性の立場が見えにくい、などであった。JCN C / APLAは、このような回路から農業や農村について考えてきたが、ジェンダーのことを含めて、国連のいう家族農業の中心が気になる。

箕曲◎ 国連は大規模化しすぎた農業へのアンチテーゼを示したいようだが、「家族農業」といつていても、いくつかの報告書の原文を読むと「その形態は多様である、簡単に定義できない」と書かれている。

国連食糧農業機関（FAO）は、以前 small holders agriculture という表現をよく使っていたが、今では family farming という言葉を使っている。では、なぜ「家族農業」という言葉にしたか。それは、土地と家族が結びついて相続されていることが大事だ、という考えに基づいているのではと推測している。

私の率直な感想は、家族と農業の関係は文化ごとに多様であるということだ。例えばアフリカでは、男性と女性が違う農地で違う作物をつくる。女性は自分の家族が食べるための作物を育てるので個人的な収入を得ることはないが、男性は換金作物を育てて得た収入を自分のために使うという慣習がある。それを「家族」とひとまとめ



箕曲在弘さん

農民運動の主たる担い手は、農村に組織された農民であったが、最近では「半農半X」のように都市で農的な暮らしを選ぶ人が増えている。こうした都市住民を「小農」の中に含んで考えていくことが必要だ。

〈注1〉 La Via Campesina

「農民の道」を意味するスペイン語。1993年に設立された小農民国際運動組織。2013年時点で、73カ国、164の組織、約2億人からなる。

〈注2〉 2013年10月、ビア・カンペシーナは国連食糧農業機関FAOと協定を結び、小農を守り小規模農業を世界的に推進するための協力関係を作った（編集部）。

市橋◎ 国連世界食糧保障委員会専門家ハイパネルの『家族農業が世界の未来を拓く』（農文協、2014年）では、小規模農業は家族の労働力を使うので「家族農業」と据えられていて、「家族」をイデオロギー的な観点から論じてはいない。国連なので、各国の国家政策に小農支援をアピールするというのが基本的な目的となっている。小規模農業を支援する政策を各国に奨励する立場として国連のアピールは必要だ。

一方で、安藤さんや箕曲さんが提起する問題がある。それはフィリピンでも同じ。ネグロスの山のバナナ農家の規模は非常に小さい。



ラオスのコーヒー生産者。ATJを通じて日本に輸入される。

にすると、ジェンダーの問題が見失われてしまう。

家族内の男女の力関係もあるが、家族間の力関係も考えなくてはならない。家族が大切というのとはわかるが、みな同じ広さの農場を持っているわけではないので、こうした農家同士がどう協働できるのか。これはとても難しい。

たとえば、ラオスのコーヒー農家は、小規模農家の農地で2ha、大規模になれば10haと、同じ家族といつても村の中で大きな差がある。収入の差も6倍から10倍くらいになる。そうすると、金を持っている人のほうが政治的にも強くなって村長になったり、仲買人になったりする。そうすると強い者

に依存せざるを得ない農民も出てくる。小規模農家が不作に直面した場合、経済的に強い者が金銭的支援をすることもあるので、それ自体は悪いことではなくても、なかには高利貸しなどをはじめたりする者もいる。

小農であるということ

安藤◎ 今、グローバルな政治の中で、小規模農民が重要な政治的行為者として登場している。近代化の波とともに農業は大規模化し、1990年代初頭に歴史家のホブズボームは、「農民は死滅した」と言った。しかし、同じ時期に国際的な小農民の組織であるビア・カンペシーナが結成された。そこで



市橋秀夫さん

そして小農民のことを考えると貧困の問題が常に出てくる。たとえば東ネグロス州の生産者の生活はバナナの民衆交易を始めたときに基本的に変わっていない。バナナを2週間に1回出荷するのに、一番長い人で片道2時間歩いてくる。それを2往復して得られるのが777円。これは統計的にみても、過酷労働という点でも「貧困」だと思ふ。オルター・トレード社（ATC）の人も問題だとは思っている。小農的な生き方は、理念としては大事だけれど、現実問題としては苦しい。民衆交易だけでは解決できない問題で、政府の関与が必要になる課題だ。

オルター・トレード・ジャパン

（ATJ）のバナナ産地の調査をしていて感じたのは、ATJはフィリピンのバナナ生産者の主体性をつかめていないのではないかと、ということだ。彼らの生活のリアリティについて、地に足のついた理解が必要で、そこからしか民衆交易の理念もめざすものも出てこないと思ふ。彼らにとつての「自立」とは何かについてもリアルな認識が不足している。

津野幸人さんの『小さい農業―山間地農村からの探求』（農文協、1995年）を読んだ。山間地農村で



ネグロスのバナナ生産者。馬にバナナを乗せて山の奥からバナナを出荷する。（撮影：山本宗補）



安藤丈将さん

時代遅れだと思われていた小農民の農業のやり方こそ、時代の最先端のものであると唱えた。ビア・カンペシーナは、小農が大企業に振り回されず自らのやり方で食べものをつくる権利、食料主権というスローガンを打ち出し、国際政治に大きな影響力を及ぼしている。今では小農というアイデンティティは、アジアや世界の農民をつないでいる。

今回、国連が提起した「家族農業年」は、食料主権、農民の自己決定権という観点から歓迎すべきものである。しかし「家族」と括ると「小農」運動がめざしてきたものとのズレが生じてくる。その一つがジェンダーの問題である。ビア・カンペシーナの運動では、農村の家父長制の問題が重視され、女性の権利の追求を組織的にめざしてきた。だからこそ「家族」という言葉は使われてこなかった。もう一つは、小農民の運動が都市住民にどう関わるかということ。ビア・カンペシーナに代表される

兼業農家を大事にしていかななくてはいけないということも言っている。理想的自立農民像アプローチではだめで、都市からどのように農村に来てもらったり、実際に働いている人がどういう自己認識をもっているのかを考えなくてはならない、と。

大橋◎ ネグロスでは「リメジョ・ヒネラル」という言葉がよく使われる。いわゆる「何でも屋」。人口の大多数を占める漁民、農民、都市の貧困者たちは、生存のためにできる仕事は何でもやる。農業の合間に大工仕事、農園のアルバイト、トライシクルの運転手、洗濯・家事手伝いなど、兼業以上

のことをやることで毎日の食事にありつけるといふ庶民の生存術だ。町でも農村でも家族みんなが働いている。農民は農業だけでは自立できない現実がある。私たち外部の者が関わる時、そこで生きる人たちの生業をどこまで理解したうえでつながれるのか、が大切なことだと思ふ。現地のNGOがバナナ産地・砂糖キビ産地で持続農業、有機農業、収入の多様性を進

〈注3〉 フィリピンの三輪タクシーのこと。

める取り組みを続けてきたが、農民たちを組織化のための集団としてのみ捉え、協同組合を作るという方法だけでは、うまくいかない。農民はもっと自由でアナーキーな精神をもっている。

野川◎APLAがネグロスでの経験を元に東ティモールでも「農を軸にした地域づくり」に取り組み始める前に、2カ月ほど、東ティモールの農村部に滞在した。コーヒー産地である山間部だけでなく、海沿いの地域にも複数滞在したが、小さな島の中であっても地形や気候が異なり、人びとの暮らしのあり方も多様だということを実感した。海沿いの地域に暮らす人は、コーヒーのような主要換金作物がないので、豚や鶏などの飼育、トウモロコシの栽培、大工仕事など、ありとあらゆることをしないと家計が成り立たない。獲った魚を蒸し焼きにして、幹線道路沿いにつくった屋台で売る。潮が引いたら子どもたちが海藻をとって夕飯のおかずにする。そうした光景も見られる。一方で、山間地に暮らすコーヒー生産者は、形式としては、家族農業だろうが、小規模農業だ

さんは、ペランダでも道路でも土があつたらとにかく種を蒔け、とおっしゃっていて、すごくラディカル。

（注4）8頁の「TOPICS」を参照。

秋山◎今、発想の転換が必要だ。3・11以降の日本の動きをみてみると、日本は「資源小国だ」という、工業化・近代化を進めるためにこれまで言い続けてきたことを、さらに強調しようとしている。「資源小国」という発想自体が違うのではないか。日本の大地の力、それを生かす水とその灌漑設備という資源はすごい。私も小さな畑で野菜作りをしているが、夫婦では食べ切れないだけの収穫がある。石油や鉱物だけが「資源」だという頭を変えていかないとだめだ。ネグロスをはじめ農村の貧困問題については、お金を得ることが確かに重要だが、同時お金を換えられない豊かなものが在ることを知る必要がある。日本の子どもが抱える問題を考えたとき、たとえば犯罪率・自殺率はアジアの農村地域では圧倒的に小さい。

吉澤◎今ネグロスでもアーバンフ



東ティモールの農村でよく見る風景。主食であるトウモロコシをふるいにかけるのは女性たちの仕事。

ろうが、コーヒーという一つの収入源に依拠しているために不安定にならざるを得ない。民衆交易品であるコーヒーという主要な収入の柱は確保しつつ、多様性をもつ小農民にどう近づけるのかを考えてきている。この間、APLAが活動してきたコーヒー生産者の地域は、多様化の取組みが少しずつ進んできたが、男女の協働や若者世代の育成など、今後の課題も大きい。

都市と農村の間で

大橋◎今回の座談会に向けて、山形の正田美津子さん（しらたかノラの会/APLA共同代表）からメッセージが送られてきた。「米の在庫量が

過去10年間で最高となり、供給過多となる見込みから60kgあたりの米価（概算）が20000〜30000円下落し、過去最低額と予想されている。さらに自由化、遺伝子組み換え作物の導入と、このままでは日本の農業が立ちゆかなくなっていくだけでなく、食料自体が脅かされている。これは農民の問題だけではない。自分の、あるいは家族の食料の安全・安心を、皆さんはどう確保したいのか？ どうすれば可能なのか？」

安藤◎都市住民の食をどうするかという問題は深刻である。都市の人びとの農業志向と言う時、リアリアした年金生活者の趣味的な農

アミニングということを言い始めた新しい階層がでてきている。健康と環境志向をもった中産階級で、従来の農村の農業ではないところに注目は始めている印象。日本でも農村と都会の差があるように、ネグロスでもそういう動きが出てきている。

野川◎長野県伊那市にあるグリーンファームという直売所が面白い。「自分で売れないと思うても、買いたい人がいるはず」という考えで、野菜や果物だけではなく、どんなものでも持ち込んで並べてもらう。その販売物の価格は生産者自身が決めて、その2割を運営費としてグリーンファームが受け取

り、8割が生産者の収入になる。また、農協は、家族単位だが、グリーンファームは個人での登録なので、女性も自分の小遣いを手にすることが出来る。さらに、売上げは、一週間ごとの、ニコニコ現金払いなので、生産者は週末に代金を取りに来たついでに買い物するという循環が生まれる。生産者と消費者が一体になっているのが成功の秘訣だろう。さらに、納品時間は決まっていないので、開店中に販売物を並べながら、買う人も出会える仕組みができあがっている。今までゲートボールをしていたお年寄りが、もう一度畑に出て畑を耕すことに生きがいを感じ、それを見ている息子世代が、

業だけでなく、若い都市生活者の農業も考える必要がある。今、若い人たちは、就職できても安い賃金で長時間労働を強いられている。しかしお金がなければ身体によいものを食べられない。大学の学生に聞くと、学食が高いので、昼食に菓子パンやカップラーメンを食べている。そんななか、お金がないならば食べものくらいは自分でつくってしまえという、都市住民がサバイブ（生存）するための小農的なものが浮かび上がっている。「家族農業年」は、これまでの農民運動ではあまり視野に入っていなかった都市の半農的な動きを巻き込んでいけるかが鍵になる。

市橋◎自分も3・11のときにフィリピンにいて、もし仕事がなくならたら、ということ考えた。正田さんから提起された問題は、一番難しい。生協の組合員か、産直の購買者として農家にすがりついて生きていくことしか今は思いつかない。母の実家は農家だったので、自分で農業やりたいと思うけど、そんな簡単にはね……。『一反百姓「じねん道」の斎藤博嗣』

定年退職後に農業を始めるというケースも多いという。だから、自然に世代交代ができて、登録生産者の平均年齢は上がっていない。他地域からの視察も多いし、海外からの視察もある。先日、東ティモールの農水相が来日した際にもグリーンファームを訪問して、感銘を受けていた。一方で、東ティモールでは、政策として、農業の大規模化・機械化といったことを打ち出しており、グリーンファームの小林会長に「時代遅れだ」とたしなまれる場面もあった。「価値がない（と思いきまされてきた）ものにも価値がある、価値を見いだせる。こうした発想は、東ティモールの人びともっと伝えていきたい。

秋山◎2016年、JNC時代から数えて私たちの活動が30周年を迎える。人と人をつなげるAPLAとしては、2年後に、これまでつながってきた農民たちが出会う場、とくに女性農民の出会いの場を持っていただろうか。出会いの後に、継続的なつながりが生まれるような……。(2014年9月23日、APLA事務所にて)



24時間、手軽に手に入るファストフード。豊かな生活？ 貧しい食？（東京都内にて）

「私たちは米国の戦争を引き受けられない！」

基地撤去から22年ぶり・新軍事協定に調印

大橋成子／おおはし・せいこ
本誌編集長

「エルカム！ オバマ！」「アメリカは軍隊をもつてくるな！」と書かれたオバマ訪比を歓迎する人たちと反対する群衆の2種類のプラカードが、2014年4月28日、大渋滞のマニラの街頭を埋めた。

オバマ大統領のアジア4カ国歴訪の最後の訪問地フィリピンで、首脳会談に先立ち、両国政府は新しい軍事協定に調印した。4月28日といえば、奇しくも62年前の1952年、サンフランシスコ条約により、沖縄・奄美が米国の施政下に組み入れられた日でもある。

この新協定によって米軍は、フィリピン軍の基地内に独自の施設を建設できるようになり、航空機や戦艦の巡回を飛躍的に拡大することが可能になる。その候補地は、すでにフィリピン全国5カ所が検討されている。かつてアジア最大規模と言われた、ルソン島のクラーク空軍基地、スービック海軍基地



「米軍はフィリピンから出て行け！」新軍事協定に反対するマニラ集会(2014年4月28日)。

に加え、フィリピンでは最後のサンゴ礁の聖地と言われるパラワン島に2カ所、さらに台湾に最も近い最北端の島バタネス島に今後米軍が駐留することになる。昨今、南シナ海への進出を強める中国という仮想敵を想定し、会談で両国政府は「アジアの安全保障を強化」することを強調した。

フィリピンの憲法は外国軍の駐留を

禁じている。地元の各紙は「新協定は憲法を考慮してか、施設は恒久化しない。協定の有効期間は10年間としているが、これは更新も可能であり、核の持ち込みも禁じているが、すでに過去の経験からその保証もままならない」と今後の展開を懸念している。

アメリカの敵は必ずしもフィリピン人の敵ではない

クラークとスービック両地区は、1992年まで米軍のアジア・太平洋の要石として巨大な米軍基地が存在し、ベトナム戦争時代は米軍の出撃拠点となっていた。1970年代から続いたマルコス独裁体制の下で、米国の支配に反対し、民族・民主主義を求めるしどい闘いを続けてきた民衆運動のうねりが高まり、冷戦締結後の1992年、比米友好協力安全保障条約を当時の上院が拒否。結果、50年に及ぶアジア最大の米軍基地は撤去された。最後の米軍の艦隊がスービック海軍基地を後にし、フィリピンから星条旗が降ろされた光景は、闘争の勝利の象徴、と誰もが喜びあつた瞬間だった。

軍事問題専門家であるフィリピン大学の教授のローランド・シンブランは、今回の新協定をめぐって、次のような

心主義から地球中心主義へ：自然の復活、緑といのちがどんどん増える活動を呼びかけています。身の回りの緑と生きものの多様性が増え、それが世界中に広まれば、新鮮な空気が満ち、地から水が湧き、砂漠化や異常気象、地球温暖化防止につながります。



今年2014年は国際家族農業年。日本一小さなお百姓ファミリー、齋藤さん一家。

それは種採り、種蒔きから始まります。私たちが普段何気なく生ゴミとして捨ててしまっている果物(リンゴ、ブドウ、柿、ミカン、西瓜、メロン)や野菜(ピーマン、南瓜)などの種にもいのちがある。街路樹、花壇、校庭、道端の草花、樹木もたくさん種をつける。地球で生きるために、身近なところから、いのちの源である「種」を採り、足元に蒔くことで、『エプリデー・グリーンピク*毎日が緑の祭典』に参加しませんか？

〈国民皆農〉みんな百姓になれ！

一反百姓の暮らしと共にある「種子」は、過去であり未来であり、子どもたちであり、緑の守護神です。私たちは新規就農以来、在来種、固定種の種子を大切に自家採種しながら、在来大豆や古代米を栽培したり、切り出した薪を燃料に杵や臼で手作りした味噌やきな粉などの農産加工品を販売してきました。しかし、2011年の福島

コメントを大学の青年たちに発している。「領土をめぐる議論が反中国の世論をつくっている。フィリピンのような海洋国家は常に領土問題を隣国と抱えてきたが、そのたびに独自の外交と交渉で解決してきた。なぜ、それに米国がまた介入してくるのか。米国はフィリピンの基地を利用し、この地域での軍事的存在感を見せつけながら、これまで中東に偏り過ぎた外交姿勢を更し、アジア太平洋重視の外交を標榜している。米国の対テロ戦争に巻き込まれてはいけない。イラクやシリアとの戦争は私たちの戦争ではない。米軍基地が戻ってくれば、私たちは攻撃を引きつける磁石になるわけだ。私たちは、フィリピンの主権を尊重し、軍事に頼らない外交を政府に求めよう。米国の敵は必ずしもフィリピン人の敵ではない。毎年、膨大な軍事費が国家予算から捻出されているが、今、フィリピン人にとって先決の問題は、農地改革であり、雇用問題であり、人びとが安心して暮らせる社会づくりである」。

集団的自衛権、秘密保護法、沖縄をはじめとする在日米軍基地……。日本の戦後レジームの転換が次々に起こる事態のなかで、フィリピンで起こっていることは決して対岸の火事ではない。

の原発事故以降、自然農法の農産物をお客さんに喜んで頂く農業をこれまで通り営むことが、私たち「じねん道」の伝えたいメッセージなのか、自問自答を繰り返して夫婦で話し合いました。あらゆる難問は人間がつくりだした問題であり、世界中の皆が土に向かい、農にたずさわわり、本気になって種を蒔いたら、永続的に問題が解決できるという思いに駆り立てられました。

ひとり一人が、自分のことは自分の手で！ 私たちは自然農法を実践しながら、10年かけて家族みんなで自家採種した種の販売を通し、〈国民皆農〉みんな百姓になれ！運動を展開中。あなたも一粒百姓からはじめてみませんか！！

〔注〕「家族の生命をささえる種を得るには、一反でよい。…一反百姓は、農業の源流の姿といえるのである。また「一反百姓論は貨幣経済からの脱出をめざしているものである。」「緑の哲学 農業革命論」自然農法一反百姓のすすめ」福岡正信著(じねん道編集&寄稿)2013年春秋社上り。

「種はまんべんなくまばらに蒔くんだよ」。6歳の彩葉と3歳の風禾、二人の子どもと一緒に野良仕事をしていると、大人には仕事でも、子どもにとっては、節分の楽しい豆まきのようにばら蒔いたり、時にはドサッと一カ所にまとめて種を捨て蒔いたりする。コンクリートの上、水たまり、家の中、どこでもお構いなしに種を蒔き散らす。まさに無為無心、農作業というより芸術活動か？ ところがどっこい、思わぬ所から育つのです。「自然は無教育にして最大の教育者」自然に仕える一反百姓という家庭自給生活は、子ども親も農的暮らしの中で共に育つ、まさに一つの学校でもあると感じています。

家庭自給生活のすすめ

私たちにとって一反百姓は、一日24時間を自分のこととして過ごす自習自習の生き方で、永続可能な未来の暮らしと仕事「家庭自給生活」です。最も重要視している点は、家庭で食を自給できる安心感はもちろんのこと、仕事と生活の距離、家族の距離、自然(命あるもの)との距離を縮めることによる、

『グリーンピク*毎日が緑の祭典』

2020年に東京オリンピックの開催が決定しました。私たち「じねん道」は、地球が生まれてこのかた絶え間なく続いている自然の営みを「Greenpic グリーンピク」と位置づけ、人間中

「一反百姓」の「じねん道」

齋藤博嗣&裕子／さとう・ひろつぐ&ゆいこ
「一反百姓」じねん道

「一反百姓——小さな農民」からの発想 — Green Philosophy and Sowing Seeds

私たちは「一反百姓」「じねん道」の屋号で、夫婦と子ども2人と共に家族4人、世界一小さい百姓を実践しています。一反は、単なる300坪(10000㎡)という広さを表す単位ではなく、無尽蔵の時間と空間が開かれる野良です。「一反百姓」は、自然農法(不耕起、無肥料、無農薬、無除草が四大原則)の創始者・福岡正信さん(1913~2008年)の著書に由来しています。2005年に東京から茨城の農村へ移住し「土の上にも10年目」を迎えました。

縦横無尽に協力しあえる関係性です。

「種はまんべんなくまばらに蒔くんだよ」。6歳の彩葉と3歳の風禾、二人の子どもと一緒に野良仕事をしていると、大人には仕事でも、子どもにとっては、節分の楽しい豆まきのようにばら蒔いたり、時にはドサッと一カ所にまとめて種を捨て蒔いたりする。コンクリートの上、水たまり、家の中、どこでもお構いなしに種を蒔き散らす。まさに無為無心、農作業というより芸術活動か？ ところがどっこい、思わぬ所から育つのです。「自然は無教育にして最大の教育者」自然に仕える一反百姓という家庭自給生活は、子ども親も農的暮らしの中で共に育つ、まさに一つの学校でもあると感じています。

03

コロサエの歌が聴こえる 02

Ego Lemosの世界

TO'OS NA'IN

東ティモールの人なら子どもからお年寄りまで誰でも口ずさめる、そういっても過言ではないのが、この『TO'OS NAIN(トス・ナイン)』という曲だ。私自身も、エルメラ県のコーヒー産地に通いながら、子どもたちに歌詞を教わり、一緒に歌いながら覚えたので、思い入れも深い。

『TO'OS NAIN』を直訳すると「畑の人」、つまり「農民」というタイトルがついている。たとえ暮らし向きは楽でなくとも、農民が誇りを持って生きられるように。子どもたちがそれを受け継ぎ、大地を、ティモールの未来を耕していけるように。そんな願いがこもっている詩だが、エゴが作詞をしたのは25年も前のこと。まだ高校生だったときに初めてつくった曲だというのだから、驚きだ。

この間、都市部の開発が急速に進んでいる一方で、地方では公共の交通機関がアクセスできるような最低限の道路も整備されていない農村があちらこちらに点在している。汗を流して大地を耕す人びとが明るい未来を描けるような、そんな国であってほしい、というのはヨソ者の勝手な願いだろうか。



落花生の収穫。

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

Sai husi uma dader san nakukun
Kafe manas kopu ida
Hamanas netik kabun

Aifarina baluk ida iha kohe laran
Hodi kaer netik kabun ba loron manas
To'o loro kraik fila ba uma

Oan doben sira studa halo diak
Ba loron ikus Ita nian
Basa inan aman servisu kolen
Fila liman makas ba Ita oan

朝早くまで暗いうちに家を出るんだ
コップ一杯の熱いコーヒーで体をあたためて

カゴの中のキャッサバがお腹を満たしてくれる
太陽の下で働いて、日が暮れて家に帰るまで

子どもたちよ、しっかり学んだよ
これからやってみんなの未来のために
働き者の父さん母さんに拍手を送ろう
キツイ仕事も未来のために

(訳:野川未央)

01

カカオ キタ kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

8

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



スヌン村の一家族。

去る6月、パプアの北海岸沿いにあるサルミ県スヌン村を訪れる機会があった。ここは山間部から沿岸部に集団移住させられた先住民族の村が海岸沿いの国道に横並び一直線に建てられている。夜遅くスヌン村に到着し、村の民家に泊めてもらった。満点の星空を見上げながら、家の人たちとしばしば雑談。家の中にほとんどモノがない。家のマルタさんは私に恥ずかしそうに、「家には何もなくて……」と言う。夫が3年前に亡くなり今は子持ちの娘、高校生の娘成人した息子や孫たちと暮らす。亡夫は前妻との間に子どもが7人いて、マルタさん自身も再婚で連れ子が7人いて、その他にも色々あって数えたら子どもが合計25人いることがわ

かった。マルタさんは何もしていないが、町で働く子どもたちがコマや砂糖を持ってきてくれるので何も心配することはないとふくよかな微笑み。森の中から出たのはもう10年前になるという。政府は目の前の海で漁業を、裏山でカカオを栽培できると説得しようだったが、両方とも軌道に乗らないまま住民たちは今でも森に入らなければならないものを採る生活を営んでいるようだ。

翌朝、海を見に出かけた。木船がひとつだけボツンと置かれていて静かな浜辺。ふっと沖に目を向けると人が波の狭間で両腕を大きく広げて何か獲ろうとしていた。友人に「あの人、何しているの?」と聞くと、彼も不可解そうに「さあ、魚でも獲っているんじゃないか?」30分は頑張っただろうか、頑強な体躯の青年は浜にあがってきた。「魚獲れました?」と聞くと、まったくダメだったと言のように頭を振った。森の民が海に生きるの大変なのだろう。

家に戻ると先ほど海に入っていた青年がいた。「あらっ、あなたこの家の人だったの!」彼はわたしたちの朝食のために魚を獲りに行ってくれたのだ。その日の朝食は缶詰のイワシを入れたインスタント・ラーメンだった。

森の民が海に生きる

04

美味しいマンガ 02

『おとりよせ王子
飯田好実』

高瀬志帆(著)、徳間書店(発売)、
ノース・スターズ・ピクチャーズ(発行)

安藤丈将 / あんどう・たけまさ
武蔵大学教員



©高瀬志帆 / NSP2010

『おとりよせ王子 飯田好実』も、そんな「一人飯マンガ」の一つです。このマンガは、インターネットのおとりよせグルメをこよなく愛する20代の男性が主人公です。主人公の飯田くんは、システム・エンジニアという多忙な仕事をしており、おと

りよせが届く日には自宅を受け取るために仕事を早く終わらせて帰宅します。基本的に食事は一人でしていますが、孤独を感じているようには見えません。むしろ一人飯を楽しんでいるようです。飯田くんは、家族団らん

の食事と職場の飲み会を窮屈に感じていて、それは距離をとっています。家庭と職場というのは、食べることを通じた交流の主な場でした。しかし社会的な変化に伴い、ライフスタイル、働き方、人間関係も変化するなかで、最近ではかつての家族や職場の形が自明なものではなくなっています。主人公の食べ方は、そうした時代の状況を象徴的に示すもの

です。食べ方の変化が垣間見えるのは、そこにコミュニケーションが消え去ってしまったわけではありませんが、飯田くんは、SNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)上で食べた物の感想をやり取りする形で非対面的に人とつながっています。職場と家族の形が自明ではない時代に、私たちがいかにして食を通して人とつながっていきけるのでしょうか。非対面的なやり方が対面的なやり方に取って代わっていくのでしょうか。このマンガは、食べることを通じてのつながりの変化を教えられる作品です。

変化する食を通じたコミュニケーション

02

マニラ・ジープニー通勤 2

小川二美子 / おがわ・ふみこ
マニラ在住、会社員

道路にいるワニ

「ブワヤ(Buwaya)」って、フィリピンの言葉で「ワニ」のこと。物陰に隠れて獲物を待つ凶暴なワニ……。マニラの道路で交通取締りをしている警察官を表すときに使います。直進する車が、右折道路に長く留まっていたりすると、「はい、いらっしやい!」(タガログ語で「ホイ、ハリカ!」)と呼ばれます。運転手は冷や汗!!

交通法規違反で、免許証を取られ、預かり証をもらって、講習へ。講習は丸一日かかるし、講習料が500ペソ(約1250円)かかるので、その場で警察官に賄賂を渡して見逃してもらう人がほとんどなのです。警官もそれを知っていて、わざとわかりにくい標識にして、「顧客」を誘い込みます。賄賂の値段は、だいたい講習料と同じ500ペソ。賄賂は、小さく折りたたんで免許証カバーの中に隠して渡します。

最近では正義感のある警官もいるので、すぐに賄賂を渡すと逆に捕まるかもしれないので注意が必要です。友人(日本人女性)は、雇った運転手がミスをして捕まったそうですが、500ペソ札がなかったので、仕方なく1000ペソ札を

渡したら、なんと500ペソのおつりが返ってきたんだとか。笑い話のような、本当の話です。

ジープニーの場合は、運転手が賄賂を払うお金がないので、たいてい預り証です。時々500ペソ、100ペソを渡して見逃してもらうときもあります。警察官にとってジープニーは「儲からない」ので、ジープニー取締り強化期間みたいなときだけ、取り締まるような気がします。

そんな運転手の苦勞も知らず、「ここで止めて!」とか、「降りるよ!」とどなったりする乗客がけっこう多いんですよ。



APLA 食堂

Kitchen APLA

06

今日の食材
インドネシア・パプア州産
カカオマス

レポーター
大久保ふみ / おおくぼ・ふみ
APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
APLA理事

混じりっけなし! ホンモノのチョコレート



APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、“誰でも簡単に作れる”レシピをお届けします。

ビターチョコレート

一番シンプルな材料で作れるビターチョコレート。カカオバターの変わりに手に入りやすいオリーブオイルを使ってみました。
※オリーブオイルを使うとカカオバターより溶けやすくなります。

【材料 (できあがりの量・約210g)】

- カカオマス.....120g
- パレスチナのオリーブオイル.....30g
- マスコバド糖.....60g
(粉砂糖の場合50gに減らしてもOK)
- ナッツやドライフルーツなど
お好みのトッピング.....適宜



【作り方】

1. カカオマスを包丁で細かく刻み、45～50℃くらいの湯煎にかけて溶かし砂糖を加えて混ぜ続けます。
※マスコバド糖は粒子が粗いので、事前にフードプロセッサーやすり鉢などで細かくしておくことをおすすめしますが、しなくても大丈夫です。



2. チョコレートの温度が45～50℃になるように湯煎にかけて、温度計で計りながら練り続けます。



※工業製品としてのチョコレートは、通常72時間も練り続けるのですが、手作りの場合は10分程度でOK(できあがりの滑らかさが足りないのはご愛嬌です)。

この作業時にチョコレートに水分が混入しないように注意しましょう。湯気にも注意。

3. チョコレートのボールを冷水に浸し、チョコレート生地を一度27℃まで下げます。そして再び湯煎で温め、30℃にします。
この作業時にも、チョコレートに水分が混入しないように注意しましょう。湯気にも注意。

4. 好みの型に流し込み、トッピングなどをして冷蔵庫で冷やし、チョコレートを固めます。固まったら型から抜いて、できあがり。冷蔵庫(野菜室くらいの温度が◎)で2週間～1カ月ほど熟成させると、味がまとまりぐっと美味しくなりますよ。



撮影協力: 斉藤和子、土井陽子

今回の雑学

巷に溢れる大量生産で安定して供給されるチョコレート。それに対抗、というわけではありませんが、材料さえあればチョコレートは自分で作れてしまうのです。

顔の見える生産者が丁寧に作ったカカオを、シンプルな方法で大事にいただく。そして実はカカオは熟成するので、味の変化も楽しめます。ただ食べるだけじゃない面白さがあります。APLAならではの“ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ”も全国各地で好評開催中です。これからどんどん盛り上がるパプアのカカオを皆さまもぜひ応援よろしくお願いします!



◀これがインドネシア・パプア州で収穫されたカカオポッド(カカオの実)。カカオポッド1個の中に、カカオ豆が30～40粒程入っています。このカカオ豆を発酵、乾燥させ、焙炒し磨砕したものがチョコレートの原料のカカオマスになります。

自慢する人

中村桃子 / なかむら・ももこ
(株)オルター・トレード・ジャパン業務課



山で切ってきた木で、ソリの作り方を地元の人に教わる。



甘酒の麹造り(左から5人目が筆者)。



1年の振り返りと次年度の作付など、メンバーで話し合い(左上が宇野さん)。



昔ながらの道具を使って小麦の選別。

ルラ
LURAの会
長野県伊那市高遠町長藤5479-1
《電話》0265-96-2207

小さいころ、自分が生きていくのに必要なものは、いつか自分でつくれるようになるにたかった。だけど。
「山から里へ獣が降りてきて。自分たちの食べものがつくられてる場所で今どんなことが起きているか、自分たちのこととして想像できるような仕組みをつくりたいんだよ」と、元上司で百姓に転身した宇野さんに話を聞いてから、家族4人での高遠通いが始まった。かつて願っていたのに、自分が得ようとしてこなかった、生きていくのに必要なもの、知恵を知りたい。せめて、子どもたちに伝えたい。私たちが家族を含めた町で生活し畑を持たない仲間たちと、畑にいる宇野さ

わたしの 友産友消しまん 02

ルラ LURAの会の巻

私たちとLURAの会という仕組みを作った。異常気象や獣害は、生産者だけが負うのではなく、シェアしていこう、お互いの暮らしを想像しあえる形をつくらう。作業は行けるときに行き、LURAの畑でとれたものは、すべて、LURAの畑でとれたものは、すおというもの。宇野さんは私たちのいわばホームファーマーだ。
高遠に通うようになり、火のおこし方、野草の見分け方、稲の手植え、稲刈り、選別、加工、を少しずつ知っていく。でも、それだけじゃない、その時、その場所にしかない音や空気、広さや暗さ、静けさ、怖さ、見知らぬ人との話や、大人同士のやりとり、緊迫感、あきらめ、喜び、申し訳なさ、疲

■ 知恵をわけてもらいながら、でも、必要なものは、技や知恵だけじゃない、ということを感じて集まりになっていようなLURAの会。参加者募集中です。



自分で作ったそりを持って山へ。

編集後記

「NO」というチリの映画を観た。1988年、ピノチェト独裁政権を国民投票で退陣させたテレビCMをめぐる実話で、一日わずか15分の枠しか許されないうなか、「平和と尊厳」を希望の歌とともに連日放映。フィリピンのマルコス独裁時代を彷彿させる弾圧にもめげず、無数の人々によって歴史が作り変えられた。この映画は2年前に製作され、あの時代を知らない若い世代に大きな反響を呼んだという。さて、翻って今の日本を見ると、相変わらずの汚職スキャンダルと「うちわ」論争。人びとの尊厳どころか政治の尊厳さえが危ういことを痛感している。(大橋)

APLAでは7月より時局懇談会なるものを開催し、理事、評議員、事務局スタッフが中心に集まって、勉強して、議論するというのを始めました。その結果をAPLAの活動に反映していきたいと考えています。「新たなフード・レジーム」をテーマとした第1回目を受けての今号特集の座談会となりました。懇談会の中ででてきた「家族農業」をテーマに話してみたものの、話題が多岐にわたり、特集に収めきれれていません。今回は都会モンどうして話してみたけど、農の現場からは違う見方もあるはず。色んなところで議論が生まれたら本望です。(吉澤)

今号のTOPICSに原稿を寄せてくださったじねん道の斎藤博嗣さん・裕子さんとは、今年4月のアースデイ東京2014で初めてお会いした際に、国際家族農業年のことで話に花が咲き、それがきっかけで色々な場面で一緒にさせてもらうようになりました。おふたりが提唱する〈エブリデー・グリーンピック〉は、都市部に暮らすわたしたちにも実践できる運動です。今後、APLA SHOPでも、じねん道さんから届く自家採取の種を取扱い予定ですので、ぜひみんなと一緒に種まきしましょう！(野川)

ハリナ HALINA

2014年11月号 vol.02-no.26
2014年11月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き(2014年8月～10月)	
8月 3日	東京朝市・アースティーマーケットにて、ガザ支援を呼びかけました。武蔵大学の校外授業をアースティーマーケット内で引き受けました。
8月 6日	東洋大学の学生グループBMS(バナナ・メクス・スマイル)が、バナナ募金の贈呈のために事務所を訪問されました。
8月 23日、24日	『ふくしま発、「ご当地エネルギー」の可能性～自然エネルギーが拓く地域の未来～』、「よみがえれ! 福島 “生きる” “耕す”有機農業のつどい」に秋山、疋田が参加しました。
8月 23日	「NGO共同シューズ・アクション Stop the killing in GAZA ガザの命を守りたい」に主催団体として参加しました。
9月 1日～11日	東ティモールへ野川が出張しました。
9月 8日～11日	ネグロスへ秋山、吉澤が出張しました。
9月 11日～16日	グリーンコープ「fromネグロス組員ツアー」に吉澤とネグロス現地インターン寺田が同行しました。
9月 24日、25日	福島県にある福祉作業施設・いわき学園(いわき市)とシャローム(福島市)及びバナナ募金送り先の青葉学園(福島市)を吉澤と大久保が訪問しました。合わせて二本松有機農業研究会との懇親会をおこないました。
9月 25日、26日	福岡県北九州市で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
9月 27日	理事会・評議員会開催。
10月 5日	東京朝市・アースティーマーケットに出店しました。
10月 11日～13日	愛知県名古屋(風「s、西光院、櫻誓願寺)、岐阜県揖斐川町(アースティいびがわ)で「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
10月 19日	土と平和の祭典2014に出店しました。
10月 20日、21日	無印良品セレオ八王子店にて「ホンモノの手作りチョコレートワークショップ」を開催しました。
10月 22日	時局懇談会を開催し、NPO法人自立生活サポートセンター・もやいの稲葉剛さんを講師に迎えました。
10月 22日	グリーンコープ共同体「fromネグロス学習会」に、グリーンコープ労働協同組合・連合職員との交流会に、フィリピン・東ネグロス州のバナナ生産者とATCスタッフと一緒に吉澤が参加しました。
10月 23日	グリーンコープ・おおすすめ委員会の学習会に balancon 生産者と一緒に参加し、グリーンコープの活動の視察もしました。
10月 25日	「balancon 民衆交易公開セミナー・balancon 生産者の素顔を探る～フィリピン、東ネグロス州編」をATJと共催しました。

事務局からお知らせ

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へご協力を！
20施設、約1400人の子どもたちへバナナの発送を継続してきていますが、依然としてバナナを通じて福島との関わりが必要であると感じております。募金額が減少してきております。皆様のご協力、よろしく願いいたします。

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 国際アピール「日印原子力協定を放棄せよ」



協力して豚舎建設!



卒業生の一人、マイクの豚舎の前で。

卒業後は、K F I R C で学んだことを各々が地元で実践していきます。卒業後にはまず、地元で豚舎を建てます。豚舎には、豚

の糞尿を集めて液肥を作る「スラッジタンク」も併設し、野菜畑や田んぼに有機肥料として撒けるようになっていきます。豚舎造りは、研修生全員と K F I R C スタッフ、過去の卒業生が協力して取り組みます。その期間は、その豚舎造りをしていく研修生の家に全員泊まり込みです。この豚舎の協働建設の目的には、お互いを助け合うことの大切さを学び、仲間同士の絆を深める意味合いが込められています。今回は、建設期間が雨季の時期と重なってしまったこともあり、大雨の影響で作業が中断したり、「スラッジタンク」

From Negros, Philippines [ネグロスより]

KF-RCの5期生が卒業

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFRC)で研修を受けた、第5期生の5人が卒業しました。5人は、2014年1月から約6ヵ月間 K F I R C に住み込み、

From East Timor [東ティモールより]

地域を引っ張っていくリーダーをめざして

2012年12月からの1年間、循環型農業についての実地研修を受けたコーヒー生産地の青年たち。残念ながら、4人のうち

唯一の女性研修生だったジョアンナは、家庭の事情などで途中リタイアという結果になりましたが、残りの3人(マルクス、マルセロ、アグス)は、2013年末に自分たちのコミュニティに戻った後、研修で得た知識や技術を地域の人びとに伝える活動を積極的に進めてきました。自分たちを研修に送り出してくれたグループのメンバーだけでなく、同じオルター・トレード・ティモール(ATT)

のコーヒー生産者グループの地域にも赴き、数日間そこに滞在、寝食を共にしながら、有機堆肥や天然の除虫剤の作り方、傾斜地での畑の造成の仕方などを指導するという経験も積んだ3人。彼らに寄り添っている現地スタッフからの報告を受けるたびに、こうした一つひとつの経験が、自信につながり、今後のための



右からマルクス、メノ(ATTスタッフ)、マルセロ、アグス。



傾斜地に段々畑をつくるために水平をはかっている作業。

ク」を造るために掘った穴に雨水が溜まってしまい、作業を始める前に水をかき出す作業から始めたり、という苦勞もありました。今後は、研修生が有機農家

として地域で自立することが第一です。そして、技術をもった農民として、その地元の農家の人びとに知識や経験を分かち合い、作った液肥を分け合って、その地域全体の農

業を盛り上げていくことが目標です。K F I R C から飛んでいった綿毛がネグロス島の様々な地域で花咲くことを願っています。(APLA 現地インターン...寺田俊)